

シェーンベルク:伝統と革新

無調、十二音技法で20世紀初期に時代の最先端を切り拓いた作曲家の一人であるシェーンベルクの音楽は、難しい、理解できないと現在でもクラシック愛好家から敬遠されがちです。当時は、一般観客のみならず、保守的な音楽批評家、作曲家らの専門家にさえも批判され続け、公演は悪評続きでした。無知ゆえに言いたい放題の酷評は、読んでいると気分を害するほどの凄さです。まだ無調ではない今回の定期プログラムの初期作品でさえ、最初はかなり批判され続けていたようです。しかし、「まるでまだインクの乾かない『トリスタン』の総譜(ヴァーグナーの作品)をさっと拭ってばかりしたよう



(c) THE NEW GROUVE Dictionary of Music and Musicians  
シェーンベルク(1907年 ウィーン)

に聞こえる」のような否定的な批評に対しても、シェーンベルク自身は、酷評した人々を機知に富んだ言葉で揶揄し、快活で楽天的な性格の対応をしており、自信と余裕があったようです。現在では傑作とされている作品も、初演の時は斬新過ぎて作曲家の考えが全く理解されず故に、こき下ろされ散々な目にあっている作品、作曲家は、シェーンベルクと言わず、彼以前の時代にも多数見られます。良くも悪くも世間の注目を集めセンセーションを起こした時点で、凡人ではなく既に比類ない才能を持った人物ということであると考えられるでしょう。

では、シェーンベルクは、どのようにしてこのような音楽の新しい考え方を生み出したのでしょうか。今回の定期2作品は、ブラームス、ヴァーグナーらに関連する作品であったことを考慮して、無調、十二音技法に至った経緯、彼の根本的な考え方を振り返ってみます。

シェーンベルクは、教育者として後進の指導、育成にも大きな貢献をしており、和声法、対位法、作曲法を含む音楽理論書や、自作、他の作曲家の作品を含む作品分析に関する書物など著作物が多数あります。そしてどの著作においても、伝統を重んじることの大切さを強調しています。また、学校やプライベートでの音楽のレッスンも活発に行い、とりわけ弟子の中でヴェーベルン、ベルクは後々重要な作曲家として後世にまで大きな業績を残していることは周知の事実です。そして、彼の

弟子たちが口を揃えてシェーンベルクの授業について次のように回想しています。「シェーンベルクは、伝統的な技法の利用や新しい技法の応用を解いたりせず、絶えず生徒を励まし、彼らの個性を深め自分の目で見て考えることを求める。音楽は飾りであってはいけない。重要なのは絶対的真理ではなくて、心理を探求することである」と。また、「モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスから学ぶように努めなさい」と重要視し、モーツァルト、ブラームスの分析を好んで授業で試みていたそうです。最先端を進む作曲家であるからこそ、常に伝統を様々な視点から深く捉える努力をしており、彼の生徒にも自分と同じように伝統から学び真実を自分で見つけてほしいと願っていたのでしょう。

「私の師は第一にバッハとモーツァルト、第二にベートーヴェン、ブラームス、ヴァーグナーである」と、彼は雑誌に寄稿しています。「バッハからは対位法的思考、モーツァルトからフレーズの長さの不揃い、様々な異質な性格を1つの主題の単位にまとめ上げること、ベートーヴェンから主題と楽句の展開法、ヴァーグナーからは、音と和音の親近性、不協和音風に主題、動機を提示する可能性、そしてブラームスからは、奇数小節、フレーズの拡大と短縮などを学んだ」と、更に詳細な内容を続けています。彼らの遺産を受け継ぎ、模倣して手を加えて拡大し、新たなものへと導かれた結果が、シェーンベルクの独自の音楽語法に結実したのです。「伝統に基づきながら、自分が伝統になるべく新しい音楽を書いている」と自認していたそうです。偉大な芸術家は先人たちを凌駕していくものだと信じ、実際に自分の信念を実現しヴァーグナーを乗り越えたのがシェーンベルクです。バッハ、ベートーヴェンらも彼らの時代において革新主義者であり、彼らの音楽が伝統となったのはかなり先のことです。そして、シェーンベルクは伝統主義者であると自負しながら、誰よりも革新的な道を歩んでいたのです。伝統主義=保守的と考えられがちですが、実際、どんな分野であれ革新的である人は、人並み以上に伝統に立ち返り、伝統を理解している伝統主義者でもあるわけです。



(c) THE NEW GROUVE Dictionary of Music and Musicians  
リハーサルを指揮するシェーンベルク  
(1937年 ロサンジェルス)

伝統から発展させた独自の音楽語法として彼によって導かれたのが、調性機能を停止し1オクターブの12の半音を各々均等に扱う12音音列です。古典的な調性の機能は半音階の音を全て抱擁し支配できるようにはなっていなかったことから、新しい組織体系を彼が創りあげたのです。彼自身、「12音による音楽、無調音楽が古い時代の最期ではなく、新しい時代の始まりだ」と信じていたのです。実際に彼の弟子たちにより彼の理論が世界中に広められ、次世代以降、音列の原理が別の次元に拡張されてセリー音楽へと発展しました。彼の弟子の一人であるルネ・レイボヴィッツにより、セリー音楽は提唱されます。12音主義を更に発展させて音のパラメーターを秩序づけし、メシアン、そしてメシアンの弟子であるブーレーズ、シュトックハウゼンらにより更に複雑な音楽が生み出されました。新しい時代の始まりは、次世代に継承され、更に形を変えて現在にまで継承されています。

また、シェーンベルクは、バッハのオルガンのための《前奏曲とフーガ》、ヘンデルの《合奏協奏曲》、ブラームスの《ピアノ四重奏曲》など調性のある過去の作品の編曲も多数残しています。新しい語法を発見した後も度々調性体系に立ち返り、分析するのみならず、実際にオーケストレーションをすることで更なる発見を模索しています。「ベートーヴェンがフーガに郷愁を感じたように、新しい様式を採っている作曲家は古い様式に帰ることに憧れる」と言及しているように、晩年にも調性のまだ使われていない可能性と新しい手法を探求しようと試みています。

「芸術は芸術のためのみに存在し創造されるべきである」が彼の信念であり、生涯、音楽のこののみを考えて前進したシェーンベルクの功績は、後世に大きな影響を与え現在の音楽に繋がっています。



(c) THE NEW GROVE Dictionary of Music and Musicians  
自画像の前のシェーンベルク  
(1948年 ロサンジェルス)

## レコーディングで予習する、次回の定期演奏会

Preparation for Next Subscription Concert

松本大輔

(クラシック専門会員制オンラインショップ「アリアCD」店主)

(ある日のスタッフとの会話より)

— 店長～、名フィルの原稿締め切りもうすぐですよ～！

そ、そうなんだよ、やろうやろうと思いつつながら…

— だってサーバーの移設もあるし、第111号大型サイト更新もあるし、来週からの講座の準備もあるし、間に合うんですか!?

うー…じゃ、じゃあ、今から一気にやっちゃおう!…えっと、曲は何だっけ?

第493回定期演奏会(小泉和裕のブルックナー)

9月10日(金)18:45/11日(土)16:00

小泉和裕(指揮/名フィル音楽監督)

■ブルックナー:交響曲第5番変ロ長調[ノヴァーク版]

— えーと、ブルックナーの交響曲第5番です。

おー、これはまたすごいね。

— あれ、この曲1曲なんですか。協奏曲とかやらないんですか。

まあ、マーラーやブルックナーの大曲は1曲だけで演奏する側も聴く側も十分なんだ。

— そうなんだ…で、おすすめCDは何にします?

指揮は誰だっけ。

— 小泉和裕、名フィル音楽監督だそうです。「小泉×名フィルのブルックナーは、第8番(2017年)をはじめ、第3番(2011年)、第2番(2012年)、第7番(2019年)と少しずつ、じっくりとこの作曲家に向き合ってきました。」と書いてあります!

そして今年が第5番か…。名フィル、今年のピークをここに持って来たって感じだな…。先日の沼尻竜典のショスタコーヴィチの交響曲第11番も名フィル史上に残る壮絶な演奏だったが、今度もきっとすごいことになるかもな。

— ほんとですか～?

お世辞は言わん。いまの名フィルはこういう横綱の大曲を力と技でねじ伏せることができるんだ。